様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 8 日現在

機関番号：　３４５１０
研究種目：　基盤研究　（C）
研究期間：　2008～2010
課題番号：　２０５２０２６５
研究課題名（和文）エミリ・ディキンスンと東洋―新島襄とウィリアム・クラークを通じて―

研究課題名（英文）Emily Dickinson and the East: Its Influence through Joseph Neesima and William Clark

研究代表者
鵜野　ひろ子　（　UNO HIROKO　）
神戸女学院大学・文学部・教授
研究者番号：　３０１４５７１８

研究成果の概要（和文）：　エミリ・ディキンスンは 1850 年代、新聞から日本について、さらにはペリーの遠征当時国会議員であった父親から直接、日本を力づくでも開国させようという米国の外交政策について知っていた。それが 1860 年以降の彼女の隠遁という生き方に影響を与えたことがわかった。それについての論文は『エミリ・ディキンスンの詩の世界』に掲載した。1850 年代の資料収集に時間がかかったので、彼女の 1860 年代、70 年代の、クラークや新島との関係についての資料収集が中途半端に終わった。

研究成果の概要(英文)：I have found that Emily Dickinson learned of Japan and even of the America's foreign policy to pry Japan out of seclusion in the 1850s through newspapers and directly through her father, who was a Congressman during Commodore Perry's expedition to Japan. I published a paper on it in the book The World of Emily Dickinson's Poetry. Since it took me so much time to collect documents in the 1850s, the researches on her relationship with Clark and Neesima in the 1860s and 1870s were halfway done.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：　文学　・　英米・英語圏文学
キーワード：　日米文化交流、エミリ・ディキンスン、日本の鎖国と開国、米国外交政策

１．研究開始当初の背景

（１）米国の代表的詩人エミリ・ディキンスンは生前ほとんどその作品が出版されることなく、無名のまま亡くなった。死後、作品が発見され、少しずつ出版され、20 世紀後半になってようやく作品の全貌が明らかになり、研究が始まった。それゆえ、特に伝記的に、今なお謎に包まれている詩人である。彼女は 30 歳を過ぎると生まれ育ったマサチューセッツ州アマストの父親の家から出ることなく、独身のまま隠遁生活を送っていたため、外の世界を何も知らないまま、人知れず

曖昧で難解な詩を書いていたという印象を一般に持たれている。一方、彼女の詩には、「沈黙」、「白」、「無」を尊重する特徴が見られ、東洋の思想に通じるものがあるので、日本人に親しまれやすいと思われるが、その理由はいまだ解明されていない。

（２）ディキンスンは隠遁者と言う印象が強いが、実際には、10 代（1840 年代）、20 代（1850 年代）の頃、何度か東洋貿易の盛んだったボストンの親戚宅に滞在し、当時最新の事物や、鉄道などの科学技術にも接していた。また、彼女は当時の女性としては、高い教育を受け、アマスト・アカデミーやマウント・ホリヨウク女学院で、当時最新の科学、特に地質学や、化学、天文学、植物学を学んだ。また、顕微鏡や写真技術など、科学技術にも興味を抱いていた。学校教育を終えてからも、それらに興味を持ち続け、隠遁生活に入ってからも、雑誌や新聞を通じて外の世界を覗き続け、最新の情報や知識を持っていたことが、彼女の詩に現れている。そして、19 世紀半ば、それまで受けてきたピューリタニズム（カルヴィニズム）の教えと、新しい科学崇拝の狭間で、宗教と科学との葛藤を詩の中で論じ、彼女独特の宗教観を形成していったと思われる。

（３）2007 年、京都において、エミリ・ディキンスン国際学会と日本エミリ・ディキンスン学会共催で、国際会議を開催した。それを機に、日本にディキンスン研究者が多いということだけでなく、ディキンスンが実際に、東洋、あるいは日本と、何らかの繋がりがあったのではないか、何か日本人と相通じるものがあるには、何か理由があったのではないかと推測し、それを立証したいと思った。そして、もし東洋あるいは日本との関係が立証できた場合には、そのような経験からどのような影響を受けていたかということを解明したいと思った。

（４） 19 世紀のボストンは東洋貿易が盛んであったので、彼女の 15 歳の時（1846 年）のボストン訪問について調査した。その結果、彼女のボストンの親戚には織物の貿易業者や中国陶器の貿易業者がいたことがわかった。さらには、彼女が当時ボストンで開催されていた中国博覧会で、中国の文化や芸術に触れたばかりではなく、そこで出会ったアヘン中毒を克服した中国人から教えられた「自己否定」に興味を抱いたことがわかった。また、その博覧会の分厚いガイドブックから、中国の歴史や社会、また仏教、道教などについても学んでいたことがわかった。当時、彼女はアマストでの宗教復興運動の真っただ中で宗教告白できずに悩んでいたのであるが、後年書かれた幾つかの詩の中で、宗教的葛藤が東洋のイメージで語られていることから、15 歳の時の中国博覧会での経験が後々まで、彼女に大きな影響を与えていたことがわかった。それについては、2007 年の京都でのディキンスン国際会議で口頭発表し、その論文は 2008 年、ディキンスン国際学会誌に掲載された。

２．研究の目的

（1）既に、ディキンスンの 15 歳の時のボストンでの経験、特に中国博覧会見学について調査をし、それらを通して、彼女が仏教に、特に「無」や「自己否定」という概念に興味を持ったことを証明した。今後は、彼女の 20 代（1850 年代）、30 代（1860 年代）、40 代（1870 年代）に、東洋について、日本について新聞や雑誌からどのような知識を得ていたかを調査し、それが、彼女の詩にどのような影響を与えていたかを研究する。

（2）ディキンスンは 1855 年２月から３月にかけて、当時国会議員であった父親の招きで、ワシントンＤＣを訪れている。帰りにはフィラデルフィアの友人宅に１週間も滞在している。当時、ワシントンやフィラデルフィアには東洋の文化が流入していたので、滞在中に東洋の文化に触れる機会があったのではないかと思われる。その彼女の旅を辿って、当時彼女が見たかもしれない東洋の文化を探る。

（3）1860 年代に新島襄がアマスト大学で学んでいたが、小さな田舎町であるアマストで初めての日本人留学生を、アマスト大学と密接な関係のあるディキンスンの娘であるエミリが知らなかったはずはないと思われる。また、友人であった（恋人であったと言う説もある）同郷のウィリアム・クラーク博士の日本経験を通して、彼女自身も幾分かは日本の文化に触れたのではないかと推測する。彼らを通して、ディキンスンが日本について、どのような知識を得ていたか、またそれからどのような影響を受けていたか、それが彼女の詩にどのように反映されているかを研究する。

３．研究の方法

(1) ディキンスンが日本や中国についてど

のような知識・情報を得ていたかを知るために、当時彼女が学んだ 19 世紀の教科書を手に入れるか、米国の大学図書館で閲覧し、複写する。

（2）米国議会図書館で、彼女が購読していた 19 世紀の新聞や雑誌の日本や中国についての記事を調べる。

(3) ディキンスンは 10 代、20 代にボストンに数回、滞在している。また 1855 年には、ワシントンＤＣに滞在し，帰りにはフィラデルフィアにも１週間程度滞在している。その道中には、ボルチモア、ニューヨークにも１泊程度は滞在しているはずである。その旅の足跡を辿ることによって、当時東洋の文物に触れたかどうかを探る。

（4）ディキンスンの生まれ住んだアマストやその町の人々と日本との関係を調べる。特に、彼女の 30 代（1860 年代）の頃には、新島襄がアマスト大学で学んでいるので、新島襄の世話をした人々とディキンスン家との関係を調べ、彼と詩人とに何か接点がなかったかを調べる。

（5）1870 年代にはディキンスンの友人のウィリアム・クラーク博士が札幌農学校に派遣されているので、彼を通して、詩人が日本についてどのような知識を得たかを調査する。

４．研究成果

(1) 米国議会図書館などで、19 世紀の新聞（マイクロフィルム）を閲覧し、複写したが、予想以上に時間がかかり、1850 年代までしかできなかった。新島襄やウィリアム・クラークと関係してくる 1860 年代、1870 年代については、資料収集や整理が中途半端なままである。

(2) 1840 年代後半から 1850 年代のマサチューセッツ州の新聞には日本について、特に鎖国や、太平洋での日本の漁船の難破、日本近海で難破した米国の捕鯨船の船員の日本での取り扱いについてなどの記事が多数見つかった。しかもディキンスンが住んでいたニューイングランド地方では、貿易や捕鯨の関係者が日本の開国を強く望んでいたことがわかった。彼女の父親エドワード・ディキンスンは熱烈なホイッグ党員で、マサチューセッツ州議会議員を務め、親戚にボストンの貿易業者がいたこともあって、当時日本の開国を奨励していたホイッグ党の大統領候補ダニエル・ウェブスターを応援していた。さらに、彼女の父親は丁度ペリーの日本遠征の時期に国会議員を務めていたので、詩人も父親を通してペリーの日本遠征について精通していたはずであるということがわかった。

（3）ペリーの日本遠征には、中国貿易の寄港地の確保や、米国捕鯨船の船員の安全確保、石炭の供給という目的の他に、キリスト教宣教という秘密の目的があったことが示唆される新聞記事も見つかった。ディキンスンの父親は当時、宗教告白したばかりであったので、キリスト教の日本への宣教という目的もあって、ダニエル・ウェブスターの日本遠征計画に賛同していたのかもしれない。一方、詩人自身は宗教告白を周りの人々から勧められても堅く拒否した。そのことを考えると、無理やり日本を開国させようと言う米国の外交政策に対して、詩人は違和感を覚えていたかもしれない。ペリーの遠征後に出版された『日本遠征記』がディキンスン家の蔵書の中に見つかった。ディキンスン家の人々が、それぞれ賛成の立場であれ、反対であれ、日本の鎖国・開国に対して、大きな興味を抱いていたということが証明されたと言える。

(4) 詩人は教科書や新聞から、日本が長い鎖国の間にユニークな文化を育てたこと、鎖国とは言え、長崎でオランダと中国との貿易は続けており、必要と思われる情報や物資のみ取り入れていたことを知っていたことがわかった。一方、彼女の書簡から、ディキンスンが、女性には参政権がない当時の米国の政治など、社会にたいして不満を抱いていたと思われるが、実際に 1850 年代後半から徐々に隠遁生活に入っていった。隠遁生活に入ってからも、わずかに選んだ友人との文通による交流は生涯続けた。また、新聞や雑誌を通じて、外の世界を覗き続けていた。それゆえ、彼女の隠遁生活は、日本の鎖国に似ていると言える。逆の観点からみれば、日本が鎖国の間にユニークな文化を育てていたということは、これから隠遁生活を選ぼうとする彼女にとって、希望の光に思えたのではないだろうか。そう考えると、1862 年に書かれた一篇の詩が、無理やり開国させられたけれど、鎖国していた日本を見習って、自分も限られた人々との交流以外は、全て締め出して隠遁生活（鎖国）に入るつもりだという宣言だと理解できることがわった。このように、彼女の 20 代での日本についての知識、特に鎖国と開国についての知識が彼女の後半生の生き方に大きな影響を与えたということがわかっ

た。

（5）アマストのディキンスンの家は現在博物館になっているが、その倉庫に東洋の食器や扇子、団扇などが保存されていたので、写真撮影した。今後、それらを、いつ、どういう経緯でディキンスン家が手に入れたかなどを調べる必要がある。

(6) 1860 年（万延元年)、幕府の派遣した遣米使節団についての新聞記事を多数閲覧、複写した。彼らがワシントンＤＣからニューヨークまでの道中で見聞したものは、おそらく 1855 年ディキンスンがワシントン訪問の途中で見たものと重なるはずである。ディキンスン自身も、訪問した場所、通った道であるので、その記事に興味を抱いたに違いない。彼女自身がボルチモアやニューヨーク、フィラデルフィアなどについて書いたものは残されていないが、幕府使節団の旅行記を集め、読むことで、詩人も見たであろう風物を想像することができた。しかしこのことについては調査が不十分で、さらに調査が必要である。

なお、上記（2）（3）（4）の一部は、2009 年 10 月にフィラデルフィアで開催されたアメリカ女性作家学会の国際会議で、また別の一部は、2010 年８月にオックスフォード大学で開催されたエミリ・ディキンスン国際学会の国際会議で口頭発表した。さらに、2011 年３月に刊行された論文集『エミリ・ディキンスンの詩の世界』（新倉編、国文社）の中で、「エミリ・ディキンスンと日本の開国」として、発表した。しかしこの論文集では字数制限があったため、情報を削らざるを得なかった。そこで、現在、英語で情報を追加した論文を作成中である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計２件）

① Hiroko Uno, “Emily Dickinson and Japan.” Emily Dickinson International Society Conference at Oxford. August 6, 2010. Rothermere American Institute, Oxford University, United Kingdom.

② Hiroko Uno, Closing Plenary “Transnational American Women’s Writings.” Society for the Study of American Women Writers Fourth International Conference. Oct. 24, 2009. Sheraton Society Hill, Philadelphia, PA, USA.

〔図書〕（計　１　件）
① 鵜野ひろ子、国文社、『エミリ・ディキンスンの詩の世界』、2011 年３月、総頁数 408。 276 頁-291 頁（「エミリ・ディキンスンと日本の開国」）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
鵜野　ひろ子　(UNO HIROKO)
神戸女学院大学・文学部・教授
研究者番号：30145718

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：